

文系国語

現代文

問一

「漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。」という設問条件に対して、読みをひらがなで解答した受験者が多かった。もちろん、ひらがなの解答は、すべて不正解とした。

各設問では、a「鎮魂」、b「抵触」、g「薄」の誤答が多かった。a「鎮魂」は、「鎮」を「沈」「珍」とする誤り、「魂」を「塊」とする誤りが目立った。b「抵触」は、「抵」を「低」「提」「定」「停」とする誤りが目立った。また、「呈色」とするものも多かったが、この文脈には当てはまらないので注意しよう。g「薄」は、字形の誤りが多かった。「薄」のさんずいは、必ずくさかんむりの下に収めること。また、右上に付ける点を書き忘れているものも目立った。

問二

この設問では、「たかが……、されど……」の構造を生かしつつ、その意味を説明する必要があった。つまり、慣用的な語句について、それを本文に即して言い換えるということである。本文の傍線部①の直前にある、「外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだ」という部分を使って、「どういうことか」の説明をしてしまっている答案が多かったが、それでは、この設問の主旨に少し外れるのである。あくまでも、「たかが……、されど……」の構造に基づいて、「内面・中身は重要だ」を前提として解答をまとめるべきであった。

問三・四・五

この三つの設問の答案に共通しているのは、本文の「」，“ ”など括弧付きの語句を、安易に取り込んでしまった答案が多く見られたことである。括弧付きの語句を記述に用いる際には、細心の注意が必要である。引用を表すなど特別な場合を除いて、原則として、記述には括弧は用いないほうがよい。それは、本文に用いられている場合も、そうでない場合も同様である。制限字数の都合などで、用いなければならない場合もあるが、その場合でも、括弧そのものは記述に含めず、括弧を外した状態で用いるようにしよう。

問三では、“距離”を、そのまま（括弧付きで）用いた答案が目立った。この“距離”を答案に取り入れる際には、物理的な距離なのか、そうでないのかを示す必要がある。制限字数内で説明できないようなら、この語句を用いない説明の仕方を考えるべきである。「道具」も同様。この語句も、どのような道具なのかを示す必要がある。

問四では、問三と同じく“距離”を用いた答案が目立ったが、この設問では、筆者が「なぜ『困ってしまう』のか」をまとめるものなので、問三以上に「どのような距離なのか」を詳説しないと、筆者が困る理由につながらないだろう。この設問は指定字数に余裕があったはずなので、安直に括弧付きのまま放置せず、しっかりと説明すべきであった。

問五では、“膜”について一般化して説明している答案は皆無であった。この設問では、“膜”の一般化を必須としたので、残念ながら、満点答案はみられなかった。解説でも述べたが、この“膜”は比喩表現である。比喩のままでは説明にならない。この“膜”が物理的なものではない、心理的な境界を意味するということが答案に盛り込んでほしかった。実際の入試においても、比喩表現を記述に取り込む際には、細心の注意をはらおう。

問六

カを選んでしまう誤答が見られた。正答のイは、悩みなく選べたようだが、正答のオは、カと迷ってしまったのだろうか、選べていない答案も見られた。カの「人々は自らの表層と人間性を整えて行為する」は、本文の「自分の人間性や内実などに関係なく、……ふるまう」と矛盾していることに気づいてほしかった。

二 古文

問一

以前の名大入試古文は現代語訳や内容説明の出題が多く、品詞分解など文法単独での出題頻度はさほど高くなかった。しかし 2020 年以降は、23 年、25 年、そして直近の 26 年と品詞分解が出題されており、ここ数年、文法問題の出題率が上がってきたといえよう。また、頻出の現代語訳の問題で確実に得点するためには、文法的な知識が必要不可欠である。文法を無視した現代語訳は得点に結びつかない。

今回の出題は、二つとも極めて基本的なレベルである。ここで点数を稼いでほしいと思って出題したのだが、総じて出来がよくなかった。

特に多かったのが、単語の切れ目が明確に記されていないため、惜しくも減点となった答案である。たとえば、波線部アであれば、“「まよは」は……、「れ」は……”などという形で答える必要がある。さらに、特に指示がない場合、動詞については活用する行・活用の種類・品詞名・基本形（終止形）・活用形を、形容詞・形容動詞については活用の種類・品詞名・基本形（終止形）・活用形を、助動詞については意味・品詞名・基本形（終止形）・活用形を不足なく答えること。

複数の意味をもつ助動詞や他の語との識別が必要なものにも注意が必要である。薄手のドリル的なもので構わないので、古典文法の問題集を一冊終わらせてみることをお勧めする。

問二

名大入試古文の現代語訳問題では、例年、設問に「適宜言葉を補って」という条件が付く。単なる逐語訳ではなく、省略されている主語や目的語などを前後の文脈から読み取り、解答に盛り込まなければならない。もちろん、傍線部内の単語の意味、文法事項に即して正確に訳出できるかどうかが大前提なのとは言うまでもない。しかし、今回の答案を見てみると、その大前提すらまともにおさえられていない答案があまりにも多かった。これは、前述した文法の知識に加えて、重要単語の知識も絶対的に不足しているということを如実に表している。傍線部中に自分の知っている単語があって、その意味が書けていれば、たとえ前後のつながりが多少おかしくとも、部分点がもらえる可能性は高い。単語の知識は点数に直結するのである。

極論かもしれないが、古文は外国語と同じである。文法、単語を知らなければ内容をつかめるわけがない。英文法、英単語を知らずして、英語の文章を読めるかどうか考えてみてほしい。まずは、文法の基本事項とともに、重要単語の知識も早急に身に付けるべきである。

問三

A この設問のポイントの一つは「てむや」の用法がわかっているかどうかであるが、「てむや」の訳し方がわからなかったとしても、ここで資盛が自分の恋人に何を伝えようとしているのか、前後の文脈から読み取ってほしかった。前書きにあるように、今、平家一門は都を追われるという危機的状況にある。この状況下（「かかる世の騒ぎ」）では、平家の一員である自分の命も危うい（「はかなき数にならむ」）と資盛は言っている。その流れで「露ばかりのあはれはかけ」と続けているのだから、「ほんの少しでいいから自分をあわれんでほしい」と言っているのだろうと見当をつけられるはずである。

説明が要求されているため「さらば」「さすがに」の具体的内容にも言及する必要があるが、満点を取るのはかなり難しい問題だったと思うが、解答欄が真っ白なままの答案も非常に多かった。1点でも2点でも部分点を稼げるように、文法、単語の知識を増やしてほしい。

B Aに比べればこちらのほうが得点しやすいはずなのだが、ほとんどの答案が空欄のままか、見当違いの説明内容だった。「物もいはれず」は「物も言えない、何も言えない」ということであって、物に対して何か言うのではない。右京大夫はどのようなことについて何も言えないでいるのか、それはなぜか、の二点に言及する必要がある。直前の「しかば」が「已然形+ば」の形であることに気づけば、「わが心の友は……おぼえしかば」がその理由に当たることがわかる。また、この部分の文法は極めて基本的なものであるため、現代語訳は容易にできる。ただし、この「心の友」がどのような友かを説明すべきなのだが、そのまま「心の友」としてしまった答案が多く見られた。

問四

この問題も極めて正答率が低かった。「身ぞうとましき」には、右京大夫が自分を嫌悪する気持ちが表れているが、自分が今どのような状況にいて、どのような自分が嫌だと思っているのか、の二点に言及する必要がある。前者は和歌中の「またためし……見ても」の内容に相当。後者はそのあとの「さてもある（我が身）」の部分である。その「さてもある」は直前に「げに命は……えせぬまま」の部分を受けている。

入試では本問のような和歌に詠まれた心情を説明させる問題も頻出だが、和歌中の表現だけでなく、その和歌が詠まれた背景までの確にとらえることが必須である。

問五

『明月記』も『うたたね』もそれほど頻出の作品ではないこともあり、正答率が低かったのはいたしかたないことであろう。ちなみに、作者名、作品名ともに固有名詞なので、漢字で正しく書かなければ正答にはならないことを改めて認識しておこう。

三 漢文

問一

cは8割以上の正答率だったが、他の二つは出題頻度がさほど高くないものだったためか、ほとんどの人ができていなかった。今回は答えられなかったとしても、またいつ出題されるかわからない。模試や問題集などで出題された単語は、その読みをしっかりと覚えておきたい。

問二

説明問題ではあるが、実質的にはほぼ現代語訳の問題。傍線部を正確に現代語訳し、そこ省略された主語を補って文末を「～ということ。」などとまとめればそのまま正答になる。「数」は頻出の語句であるし、「趣」は読みが振ってある。「共具（供具）」は【語釈】に訳が出ている。そこに至るまでの内容も全く難しくない。「具」を「家具」や「道具」と訳している答案があったが、【語釈】を確認していない証拠である。

問三

「従」を動詞「従フ」と読んだ答案が非常に多かった。ここは「所」から返読しているので、助詞「より」と読まなければならない。また「より」と読めてはいても、漢字で書いてしまっただけは誤答になってしまう。漢文の基本事項である。再読文字「宜」が正しく読めていない答案も見受けられた。さらに、それ以前の問題として、返り点について理解できていないように思われる答案もあった。古文の文法や重要単語と同じく、漢文の句形（句法）、重要語の習得をおろそかにしては命取りになる。なお、特に指示がないかぎり、書き下し文は漢字かな交じり、かなは歴史的仮名遣いを用いて答えるのが一般的である。

解説でも触れたが、傍線部に「勸説」という使役を暗示する動詞があるので、そのあとの動詞には送り仮名として使役の「シム」を補う必要がある。その点までおさえられていた答案はほとんどなかった。これを機会にこの知識も頭に入れておこう。

問四

解説でも触れたが、「此計」とは、疏広の子孫たちが老人に依頼した内容を指す。子孫の会話部分は「曰」のあと「子孫冀」から傍線部2の「置田宅」までである。この部分を現代語訳し、説明の形に整えればそのまま答えとなる。非常に得点しやすい設問のはずだが、あまりにも出来が悪かった。他の設問にも言えることだが、内容的に合っているかどうか以前に、意味の通る日本語が書けていない答案も多く見られた。

問五

他の設問に比べて、得点できていた答案が多かった。「豈ニ～ンや」が反語であること、「老悖」が【語釈】で説明されていることをおさえれば、容易に正解できる。

問六

この設問も、比較的出来がよかった。傍線部には難しい単語、複雑な句形（句法）は用いられていない

ので、ほぼ逐語訳で事足りる。ただし「其」の指示内容は具体的に示し、「生怨」を自然な日本語で訳す必要がある。「生怨」を「恨みを生かす」などと訳した答案もあったが、「生」についている送り仮名を考えれば、「生かす」ではなく「生じる」であろうことはわかるはず。細かい部分まで丁寧かつ正確に読む癖をつけることが肝要である。

問七

本問は、本文の主人公である疏広の考えをまとめよ、というもの。登場人物の考えは、その行動や会話部分に表れている。つまり、本文の内容を正確につかめば、解答を組み立てるための“材料、は得られるということである。その“材料、を 150 字以内という指定字数で意味の通る日本語に組み立てるのは、もちろん簡単なことではない。絶対的に練習が必要である。

答案を見てみると、解答欄が空欄のままか、何か書いていても得点に結びついていない人があまりにも多い。今回この設問で得点できなかった人は、自分に何が足りていないのか、しっかりと分析してほしい。本文の内容がつかめなかったのか、または、内容はつかめていても 150 字以内にまとめる力が足りなかったのか、それによって今後の対策のしかたが違ってくる。前者の場合は、まず漢文に慣れる練習が必要だ。重要句形（句法）をマスターし、重要語句を身に付け、とにかく文章を読むこと。後者の場合は、過去問題や練習問題を解く際に、本文の内容を要約する作業も加えてみることをお勧めする。

名大入試漢文では、例年、最後の設問として指定字数 150 字以内の記述問題が出題される。ここで 1 点でも 2 点でも部分点を獲得できるよう、長文の記述問題に対する苦手意識を軽減しておきたい。